

「地域社会の生産と経済——中国少数民族地帯の過去、現在、未来」

総研大・国際シンポジウムは毎回、先進的な研究テーマを取り上げてきた。2006年9月に国立歴史民俗博物館（歴博）で開催された「地域社会の生産と経済——中国少数民族地帯の過去、現在、未来」では、中国南部の農耕民族が守ってきた環境保全と生業を両立させた生活様式についての調査結果が議論された。先進国における市場経済型農耕が自然に及ぼす影響が問題になっている今日、環境保全と生業を両立させる可能性をさぐり、そのモデルを提示することが、参加した研究者たちの目標であった。

シンポジウムの発端となったのは、歴博と北京中央民族大学が共同で行った中国・海南島での伝統的な生活様式と観光開発による変容の調査であった。調査期間は1999年から3年間。ある村では水田の生産力を高め、その余剰を換金化し、従来狩猟で得ていた肉類を購入するという新たな生業戦略が生まれていた。一方で、水田の雑草を採集をすることによって、環境保全と生業の両立が図られ、市場経済とのバッファーができていたことが発見されたのだった。

海南島で得られたこのような結果を、もっと大きな地域で実証していこう。こうして調査対象は雲南省に広がり、研究のカウンターパートに雲南民族大学が加わった。その調査の概要については本文に書かれているので省略するが、フィールドをともにしてきた中国側の研究者と現地で十分に議論することはなかなか難しかった。

た。それぞれの問題意識がどこにあり、共有できる課題は何なのか。今回のシンポジウムはこのような機会をつくる第一歩として考えられたわけである。

今回のシンポジウムには、調査にあたった日本と中国の研究者だけでなく、韓国からも稲作農耕文化の研究者をコメンテーターとして招待している。

「東アジアの稲作文化、畑作文化の行方について、今後は東アジアの国レベルで考え、調査を継続していきたい」

シンポジウムを企画した篠原徹教授はアジアの力を強調する。



雲南の民族文化について講演する和 少英・雲南民族大学副学長

かしそこでは、近代化とはかなり無縁であった人びとの生活と生物多様性の関係については論じられていない。地球上で人工的攪乱環境といえどもっとも面積の広いはずの農耕地（面積的には欧米や日本などの先進国が多くを占める）で、「自然の多様性が生業の多様性を担保」できなければ、生物の多様性など維持できるはずもない。この言葉の逆は「生業の多様性が生物の多様性を保証する」ということであるが、ヤオ族の生業活動はまさにこのことをおこなってきたといえる。

こういう自然に無意識的介入する人々を、自然保護思想の立場から皮肉にいうと、かつて「一週遅れのトップランナー」（この言葉は先述した掛谷誠さんから教えても

らったのだが）と自虐的にいわれていた。現在では、「一周先のトップランナー」なのかもしれないが、現実にはこうした世界に生産性向上とモノカルチャー化が叫ばれ、除草剤などの欧米的な近代化が押し寄せているのが現状である。先進国での環境保護の政策として、バイオ・エタノールの生産が主張されているが、バイオ・エタノールの生産は東南アジアなどの焼畑農耕民の生活世界やそのまわりに存在する熱帯林などを破壊してトモロシなどの巨大なプランテーションが作られていくことになる。これではエスノサイエンスから何も学んでいないことになるのではないかと恐れる。



篠原 徹（しのはら・とおる）

私の研究テーマは「人と自然の関係における民俗学的研究」というものですが、最近是中国雲南省とヴェトナムとの境に住む人びとのところで研究しています。ここには樹冠の閉鎖した亜熱帯降雨林があって、森と人の関係が中心的な問題です。山歩きが好きな人間には魅力的な地域です。（写真はヤオ族の村の子どもたちと筆者）